

横井小楠実学の系脈

——蘇峰・蘆花の意味——

榎 林 滉 二

一、

以前、徳富蘆花の作品を読んでいて、「日子日女」ということにふれ、不可解な思いにとりつかれたのを思い出す。純粹の宗教学ならいざしらず、「思出の記」や「自然と人生」などの作者が、自分のことを、あたりはばからず、日子といい、自分の妻のことを日女という、それが奇妙に思えたのである。時代に対する諷刺か、それとも何かの比喩か、しかし、それにしては、どうも直情にすぎると、その思考はあまりに唐突で短絡的である、論理の中間項がない、それが不思議であった。

蘆花の兄、徳富蘇峰の有名な変節の基底に「時流随順」というものがあり、それは、横井小楠流の実学の系流ではないだろうか、私はかつて考えたことがあった。⁽¹⁾そして、今、この、蘆花の奇妙な短絡思考を考えると、ここにも、横井実学の一つの流れを感じるのである。以下は、その一系流についての考察を目的とする。

注(1) 例えば次のようである。

「日を旗章とする日本に生れた事を、私共は感謝する。私共は日本の本に生れた日子日女である。地球は一年かゝつて日を一周りする。私共は一年かゝつて地を一周する。」

日をめぐる地の一年を日の本ゆ地を周らんとす日子と日女とは」(「日本から日本へ」大10・3)
「長崎を出た翌日は二月一日、陰暦の一月一日で、即ち支那の元旦である。

夜来の風波に朝寝して、九時近く船窓から眺めると、最早海の色が水つぽくなつて居る。

海は色を唇は朔をあらためて支那は迎へぬ日子日女の船」

(同 前)

(2) 「横井小楠実学の一系譜——いわゆる透谷的なるものの反措定——」(『日本文学』昭45・8)

二、

「新春」(大7・4) 「竹崎順子」(大12・4) 「富士」(大14・5) 「昭3・2」など、一連の、いわゆる蘆花の自伝的な小説群や、あるいは「思出の記」(明34・5)などに仄聞される徳富一族は、いわば、明治前半期から大正期にかけての、日本近代化の象徴といえよう。令名高い矢島の七姉妹や徳富一族は、政治、思想、言論、教育、文学などの世界に、それぞれの旗幟を見事に掲げている。教育の竹崎茶堂・順子、矯風会の矢島樫子、思想の徳富蘇峰、文学の蘆花、百花繚乱の觀をそれらはみせ、奇妙に栄光に包まれた一族が

そこに存在する。そして、その一族のリーダーシップをとったのが、越前福井侯に賓師として招かれ、その政治に活躍し、明治新政府の参与として新しい日本政府の指針を示していた横井小楠である。

この小楠の栄光とリードのもとに、この一族は伸展していくのであり、蘇峰徳富猪一郎はその直系にあった。小楠、その高弟徳富一敬、一敬の長子蘇峰と直流した明治実学の流れがそこにある。明治の思想界に一つの強靱な思潮をこれが作りあげていったことは、肥後実学の討究をまつまでもなく、蘇峰の主筆した雑誌『国民之友』の盛行一つによつても明知されよう。これに対して、蘇峰の弟藍花の場合には、今一つの系脈があるようである。藍花は蘇峰よりも、思想的に出発が一世代おくれる。したがって、蘇峰から藍花へという流れの成立も可能なのであるが、そして、事実、ある一面ではそれも存在するのであるが、しかし、ここでは、今一つの流れも加えてみたい。すなわち、横井小楠、その子横井時雄、藍花の流れである。つとに、熊本バンドの一員として、ついで、今治基督教会の総帥として、あるいは、政治家、思想家として活躍した横井時雄の存在は、藍花の精神を考へるとき、今一度、考察し直してもよいと思われるのである。

いわば、蘇峰や横井時雄という嚮導体を通して、小楠の影響下に、藍花は存立したといえるようである。とくに、兄蘇峰とは、体質の相異や、幼時からのコンプレックスの問題もあり、事情はそれほど簡単ではないが、そのあたりを少し考えてみたい。

三

今日、藍花の著作を読み直してみると、その思想がきわめて単純

簡明であるのに気づく。まさしく、驚くほど単純である。「自然と人生」とか「みずのたはこと」などにおける自然景物の描出はしかたがないとしても、自伝的なビルドワンクスロマンとみられる「思出の記」にも、氣をつけてみると、何一つ思想の深まりはない。「自修」による治国平天下的なものと、儒教的な立身出世主義と、伝統的な勤善懲惡主義が、外形的な、近代キリスト教の香りや、近代的自我行動主義の底に、確固として位置をすえて動かないでいる。そこに多数の行動人は存在している。しかし、思惟の中に沈潜する人物は奇妙に少ない。もしくは、それが造型されていて、その思考の深まりはないようである。主人公菊池慎太郎が、親友兼頭道太郎の落雷による死を期に生涯の一方針を確立したかみえた、キリスト教の発悟も、唐突のままに終わり、それ以上の感銘を持続させない。この親友の死を通して、霊界の覚醒を感じたはずの男が、以降、簡単にその宗教的命題から逃れ、官学に遊び、時事評論家として名をあげ、故郷へ錦を飾るのである。唯一の思弁存在の駒井先生にしても、その外貌や風采はさつそうとしてあざやかであるが、しかし、その思想の内質の詳しい展開はない。馬場辰緒をモデルにしたといわれるが、馬場の思想的影響のさほどないことはよく指摘されているところでもある。

また、この「思出の記」には、野田伯父を中心にした、当時の実業の見事な描出があるし、また、この時代の塾生活や学校のありさまも多彩に描かれている。思想的にも教育的にも、それは今日、注目してよいと思われるし、また十分に分析に耐えうる資料ともなりうるであろう。しかし、そこに深甚な認識の深まりや広がりや求めようとしたら、徒勞に終わるようである。藍花には思想的な深みは

殆んどないようなのだ。例えば、「みゝずのたはこと」の中に、半ばの真心をこめながら次のように自戒をし、またすぐに、それをよしとしているところに、彼の特質の一つがある。

「彼は昔耶蘇教伝道師見習の真似をした。英語読本の教師の真似もした。新聞雜誌記者の真似もした。漁師の真似もした。今は百姓の真似をして居る。

真似は到底本物で無い。彼は終に美的百姓である。」（「みゝずのたはこと」大2・3）

ところが、この藍花がわずかに残した、有名な思想的行動がある。兄蘇峰ゆずりのジャーナリスティックな感覚と、その芝居がかった行為とでもって、人々に多大の驚異と関心をまきおこした、大逆事件に関する反応がそれである。一高弁論部主催の講演会において「謀叛論」と題する、この事件に関しての講演は、今なお人々に語り伝えられている。当時、次第に強大になりつつあった絶対主義的な国家体制に対する、きわめて直截な反論とみてとれたからであった。そしてまた、結局は、提出されなかった、「天皇陛下に願ひ奉る」という直訴状のごときものも、今日、私達の感懐を不思議にそそる。これは、大変な思想行動だと思いがしてくるのである。

しかし、それらの内質を今一度詳細に見直してみると、そこには、きわめて素朴な単一論理しか存在していないのに気づかされる。

彼の論理は複雑な思弁の展開の後に、ようやくこれという形で提出されるものではないようである。自分がこれと判断したら、もうそれで問題は一気に結末にまで行っている。論理のひだやかげりや

そういった様々の中間の模索がそこには欠如している。

ちなみに、この有名な「謀叛論」の論理をおつてみよう。

「暴力は感心が出来ぬ。自ら犠牲となる共、人を犠牲にはしたくない。然し乍ら大逆罪の企に萬不同意であると同時に、其企の失敗を喜ぶと同時に、彼等十二名も殺したくはなかつた。生かして置きたかつた。彼等は乱臣賊子の名を受けてもたゞの賊ではない、志士である。たゞの賊でも死刑はいけぬ。況んや彼等は有為の志士である。自由平等の新天新地を夢み身を献げて人類の為に尽さんとする志士である。其行為は假令狂に近いとも、其志は憐れむべきではないか。」

「諸君、幸徳君等は時の政府に謀叛人と見做されて殺された。が、謀叛を恐れてはならぬ。謀叛人を恐れてはならぬ。自ら謀叛人となるを恐れてはならぬ。新しいものは常に謀叛である。」（「謀叛論」明44・1）

その思考は、彼らは志士である、だから救うべきだ、あるいは救われるべきだと主張するにとどまる。この男たちの論理をくみとろうとする気配もなければ、国家体制や権力機構の問題もそこには配慮されていない。むしろ、その必要性さえ彼は拒否しているのである。「天皇陛下に願ひ奉る」の論理も例えば次のとおりである。

「彼等も亦陛下の赤子、元来火を放ち人を殺すたゞの賊徒に無之、平素世の為人の爲にと心がけ居候者にて、此度の不心得も一は有司共が忠義立のあまり彼等を宥め過ぎ候より彼等もヤケに相成候意味も有之、大御親の御仁慈の程も思ひ知らせず、親殺しの企したる鬼子として打殺し候は如何にも残念に奉存候。何卒彼等に今一度静に反省改悟の機会を御與へ遊ばされ度切に奉祈候。」（明44・1）

直情的な、事件への反応がそこにはあるだけのようと思われる。今一つ、彼の起こした思想的な行爲として、第二回目のヨーロッパ旅行の最中に披瀝した、「所望」という次のような一文がある。七ヶ条にわたる、世界への公開状をそこにせ、世界平和への提言を行なっている。

「一、現在の講和会議を進めて世界的家族会議とし、全世界の各民族各種族の男女代表者を会して、人類の福祉を増進すべく、意志の疎通と感情の融和を図る。(人類総会議は、時折開かんことを望む)

二、新紀元の創始 (略)

三、陸海軍全廢 (略)

四、税関撤廢 (略)

五、國際貨幣の制定 (略)

六、還元 (略)

七、天赦の年 (略)

新紀元元年四月二十一日朝 エルサレムに於て 徳富健次郎

愛」

(「日本から日本へ」)

この論旨を基底として、彼らは世界のアダム・イブとして、日本の日子日女として、復活したキリストとして、世界への旅に出るのである。しかし、あたかも、第一次世界大戦後の、いわば、最もその論の、世界に受容される時期であったにもかかわらず、世界のいづれにおいても、それは一顧さえされなかった。意気こんで世界へ旅立った彼が、次第にしおれてゆき、その紀行「日本から日本へ」の内質が変化してゆくことは、すでに前田河広一郎氏も指摘されるところである。

ところで、私の注目したのは、その彼の変化にあるのではない。考えたいのは、そういった薔花の思考法なのである。あるいは、その唯一の思想と思われる世界平和や世界国家の思想についてなのである。

これらの思想や思想活動は、よくみると、奇妙に混合する二つの形態よりなりたっている。一つは、簡略な世界統一論であり、今一つは、その内質補弱としての、キリスト教的な思考法である。「日本から日本へ」の長い旅行中、彼は、奇妙なこじつけをして奇蹟をこしらえようとしたり、新紀元と称して新しい時代の到来を予告したり、旅のあちこちで、キリスト的愛の施しのつもりでチップの大盤ふるまいをしたりしている。その最大のものが、彼の大事にしていた水晶の十字架を人にやり、惜しくなったので、返還をせまったところ、それが粉失していたことと、妻愛子のなくしたカタバミの髪飾りを失った話である。

次のように、それらは、十字架による形式的な信仰をなくして、自由な信仰の世界に生きることを問題にしている。

「あの Emerald の^{エメラルド}の⁽⁶⁾ジュンはカタバミの花で、カタバミの形は正しく十字花だ。俺の水晶の十字架は菘君が落してくれた。Emerald の十字は^{ネズミ}聊が落した。若くはいさかひが落したと云ふてよい。『十字架の時代は過ぎた』と云ふ人の妻からそれが装飾でも十字のものが取り去られるのは自然でないか。其国旗が十字ぬきの瑞西で十字のピンを落すは、人のみか処も其処を得て居る。」「(「日本から日本へ」)

そこには、次に示すように、世界平和という大志向を前にして、それを行なう再臨したキリストに擬した自己の立場の設定があ

る。そのためには、彼は、キリストと対等、もしくは、その生れ変わり得てなくてはならなかった。そのようによそおいたかつたようである。⁽⁸⁾

「世界平和は復活基督にまたなければならぬ。今日キリストといへば、西洋のもの、如く思つて居る。これは大なる誤りで多くの宗教は皆この亜細亜から出てゐる。決して西洋のものではない。一般に西洋のものだとしてゐるキリスト教を、真に日本のものにするこゝである。」（「私のステッキ」大11・3・5講演）

これらを統合してみると、蘆花の思想はきわめて素朴な単一思考に落ちつく。前者、すなわち、大逆事件に示した彼の行動は、幸徳秋水たちの論理の正否ではない、それを不当に弾圧する権力への怒りでもない、もつと素朴な、前途に有為性のある若者達の死を悲しみ、それを救おうとする意識のうちから出た、ひどく単純で純粋なものなのである。それも、それを救うには、もはや恩赦という方法しかなかったという状況の制約があつたとはいへ、実に短絡的に天皇にまで直結している。例えば、同じ思考は、次のようによく言及される。

「愛国、忠君、其は君が説くに任す。願わくば陛下下の赤子をして餓ゑしむる勿れ。」（「自然と人生」明33・8）

そして、この思考法は、後者でもいえる。世界平和理念を核にすれば、他の醜俗は、思うさまに切りすてることが可能なのである。そこでいきなり日子日女の思想が可能になつてくるのだ。

いわば、一気にその頂点までその思弁は走りきつてしまふ、その中間理念を切りすてたところで、それは成立してしまふのである。もちろん、その中間のものを埋める作業を彼が行なつていないわけ

ではない。未完におわつた「黒潮」の中の、煩悶する壮士東三郎は、その一例といえよう。しかし、問いつめていくと、この構想は、実は兎蘇峰に受けたものであり、また、その故もあつてか、六巻を想定されていたそれは、最初の一巻と、第二巻の前半少して杜絶してしまつてゐる。恐らく、彼における唯一の思想小説となつたとしたこれも、そこで中絶してしまつてゐるのだ。

こゝらに、蘆花の思考法の一つの特色がある。頂点に一気にのぼり、その論理の欠落をキリスト教の自己流解釈により補おうとしてゐるのである。今一つ、この思考の例を次にあげておく。

「寤めよ、日本。眼を開け、日本。皇天の爾に期待し玉ふ所は、層々たるものにあらず。夢の如く、水の泡の如きものにあらず。大義を四海に布くは爾の使命也。平和の光を日の如く輝やかすは爾の任也。爾の武力を恃まずして爾の神を恃め。（中略）爾父なる神の前に跪いて、平伏して、其指導を仰がざる可からず。日本国民、悔改めよ。」（「勝利の悲哀」明39・12）

注(1) 萩原延寿『馬場辰緒』中央公論社昭42・12など参照。

(2) 一例をあげる。

「此れからは地方有志家の巨魁として、卒先して殖産興業の事に従はうと云ふので、もと或雅人が住んで居た此丘陵の地面家作を買ひ取つて蚕室を立て、牛小屋を作り、豚小屋を拵へ、鶏作をしつらひ、また夥しく果樹を栽え茶や桑を仕立て、西洋蔬菜類を作つて、文明的殖産家の先達を以て自ら任じて居るのである。」

（「思出の記」明34・5）

(3) 「そこから思想を汲まうといふものは必ず失望する。内心の

秘密を探らうとしても益なきことである。書簡集の蘆花は全く常識極まるものであり、従つてその人間が常識で、正直で言葉の嘘が云へない人であつたことが推察出来る。」(唐木順三「徳富健次郎」昭21・1)

つてゐるやうだが、そこに興味あるかれの思想の変化が潜むやうに思はれる。」(前田河広一郎「蘆花の芸術」昭18・11)

(7) 「私は日を忘れなかつた。今日は1916年の十一月十一日である。十一月十一日―恰も世界大戦の休戦一周年の其日に、私共が英吉利に上陸するのは正に其時を得て居る。」(「日本から日本へ」)

(4) 例えは次のようなもの。

「とにかく普通の演説ではなかつた。態度は真剣だし、論旨は深刻だし、みんなかたくなつて、息をつめて聞いていた。会場の空気が、極度に緊張して、拍手をするものもなければ、呟払いをする者もない。いつてみれば、しずかな太古の湖水に蘆花の声だけがひびびいている、という感じであつた。最後に『人格の修養である』とむすんで壇をおりたが、一生渾に二度と聞くことのできない大講演であつた。」(「河上丈太郎談、『明治文学全集42、徳富蘆花集』解題より)

「両足のない人に妻が三片を与へた。而して急いで来る拍子に、妻の *Bagg* の口が開いて、懐中鏡が落ちて二つに破れた。結婚前に彼女が買った小さな四角い鏡。縁喜を掲げば、破鏡は離婚を意味する。新しい縁喜を祝へば、何もかも新しくなる時節だ。」(「日本から日本へ」)

「新聞を見ると、*Genève* 間の汽車事故で大分死傷があつた。千法の罰金を払ふ前夜私共が通つたあの線路だ。時処の隔てこそあれ、これもナポリの天井であつた。」(「日本から日本へ」)

(5) 「五十一歳の私徳富健次郎と、四十五歳の妻あいと、婚後廿五年、新しくもない夫妻が、卒然としてアダム、イヴの自覚に眼ざめたのは、実に此紀元節の天明であつたのである。」(「日本から日本へ」)

(8) 「十字架は最早沢山だ。何故基督教徒は十字架にばかり纏りつくのであらう? 何故血だらけの耶蘇ばかり仰いで、復活の栄光輝く活潑濃地の基督を仰がないのであらう? 人類の新紀元は、十字架の高調を以て始まるべきではない。私はもうく決して十字架に未練は残すまい。」(「日本から日本へ」)

「私は日本人である。だから私の血は先づ東洋の為に動く。然し私は人である。だから西洋人の腹にも、私は入り得る。

(9) 今少し例を引いてみる。

日輪は遍ねく照らす。日の子、日の女、は一切衆生の父たり母であらねばならぬ。」(「日本から日本へ」)

「私が云はずに、誰が私の曰ふ事を云はう? 山の上のエルサレムは、声を出すに好い場所である。復活節は好い季節である。私は言ふ。私は言はねばならぬ。

(6) 「蘆花が『所望』七ヶ条のある種の運動家のやうにどこまでも持つて廻はらなかつたことに、『日本から日本へ』の前半聖地の旅と、後半ヨーロッパ巡りとが、異様な対照を示してゐる。このことの不思議は読者にも批評家にも、あまり気づかれずにをは

其為にこそ来たのだ。」(「日本から日本へ」)

「食糧は乏し、石炭は乏し、来る冬を伯林三百萬、独逸七千萬

の生霊は如何して過すであらう？ それを思ふと私共は見捨て、中々去りかねる。二人の胸に此罰せられる兎の独逸を等とかけ抱きたい。」（「日本から日本へ」）

四、

ところで、こういう思考の源をたずねていて、ふと思ひあたる一点がある。というより、彼の思考の中心論理のようなものである。

それは、藍花が、横井小楠を語るとき、くり返して使用する評語である。次にすこしあげてみよう。

「抑も翁が愚鄙の藩の百三十石の貧士の家に生れて、世界的眼光を有する哲人となり、」（「青山白雲」明31・3）

「米人ではワシントンを推稱し、自分を使つてくれる者があつたら、太平洋を渡つて米國に説き、日米提携して四海の兵戈を止むるのだ、と酒の席にも木音を吐いた。」（「太平洋を中にして」大13・8）

「小楠は維新前の幕府の末の乱れて居る際に、世界の平和といふことを考へて居た。」（「私のステッキ」）

「よろづ窮屈な徳川時代に早くも世界の平和を真面目に考へた程ずばぬけた頭の横井小楠が、（下略）」（「竹崎順子」大12・4）

「説く処は『天』でした。『自然』でした。其結論は開國です、開國の親交です、世界の平和です。」（「竹崎順子」）

必ず、その小楠論の基底には、世界平和論が言及されている。これは注目してよい事実と思われる。

藍花の眼にうつつた、一族、郷党の師横井小楠の中心思想はそこにあつたようである。小楠の開國論も、経世論も、教育論も、すべ

てそこに統括するように藍花は思っているかの感がある。もつとも、兄蘇峰もその点にふれていないことはない。しかし、蘇峰はより小楠の発想の方法に近い。むしろ、小楠の自在な発想が彼の小楠像には多くある。明治二十九年、民友社は「横井小楠文」と銘うってそのエッセンスととり入れた小冊子を出しているが、そこで問題にされているのは、「学校問題」や修身的なものが多く、平和思想はさほどとりあげていない。また、『小楠遺稿』（昭17・7）の序で蘇峰が問題にするのも「臨機応変」という発想法である。

それに対し、藍花の小楠像を今すこし追つてみると、藍花の小楠に初めてふれるのは、明治二十年、『同志社文学雑誌』に発表した「孤墳之夕」と題する一文である。これは藍花自身としても処女作に近い一文であるが、彼はここで、小楠にふれて、次のように高く評価する。

「（前略）此時に当り先生にあらざれば誰か天容海濶の大識見を以て鎖國の到底行はる可からざるを看破し群言蜚集の中に立て独り開港の論を發する者あらんや。」（「孤墳之夕」明20・5）

少し、無理な呼応であるが、これを年譜的事実と照応するならば、この小楠憧憬の文が描かれた、その直前、明治十八年から十九年の前半、彼は、四国今治の横井時雄の所へ寄寓して、伝道と英語教師の生活を送っている。有名な「黒い眼と茶色の目」の中にみられるように、ここで、この従兄横井時雄を、やや平凡にすぎるとして、後には物たりなきを覚え、一緒にいた友人を同志社へ奔らせたりしているが、しかし、今治へ来た当座は、やはり、この盛大にならんとする教会の若き指導者横井時雄に近づいたであろうことも推察できる。当時のこの教会のさまを、長野浪山氏は次のように記されて

いる。

「今治は基督教の伝道史中有名な土地である。それは横井小楠の息横井時雄氏が最初に開拓した伝道地である。私は幼少の時、彼等の熱烈なる伝道振りを見たり、聞いたりして、感心して居たことを覚えて居る。殊に、横井時雄氏の洋風まがひの清楚な住宅と同氏の気品高い潇洒たる風姿は、幼い私の心にも深い尊敬の念を植ゑつけた。」（「今治時代の蘆花氏」大12・8）

ここで、少し、その時雄自身の論を提示してみよう。父小楠ほどの偉材ではなかったが、しかし、かなり教養な生涯を彼は送っている。だが、その発想法をみると、これもかなり簡潔である。

次のような、世界論の提出の仕方にもそれに近い。

「即ち吾人日本人のミツシヨンは東洋諸邦の先導者となり教師となるにあり。日本は植物試験場なり。此邦に於て西洋の宗教文物を試験し、後に移して以て六億万の東洋諸國民に分たざる可からず。」

（略）

請ふ試みに彼が最良の思想を取り企図を取り精神を取り以て我國生を養ふこと今後百年及ぶと假定せよ。百年は人生の三代なり。豈に百年の後欧米の未だ曾て達し能はざる処の文化の程度に達し、独り東洋諸邦の教師となるのみならず、亦欧米の教師となることあらんも計るべけんや。」（「日本今後の困是」明21・7）

また、次のような女性解放論などもその例として考えられるであらう。

「私は一日も早く進んで男子を説諭する様にしなければならぬと思ひます而して其の前にそれが出来る様には姉妹方の実力を養ふこと即ち學問を勵むこと宗教を信すること及び実用に練達する

ことの三者を為さなければならぬまいと私は考へます。」（「日本現今之婦人」明21・6）

彼にも、時代、状況の今一つの追求の眼がないのである。ひとえに、修身的なものに帰一していく。

ここで、彼の宗教上の態度も一寸ふれておくと、次のようになる。⁽⁹⁾

「余曰く余は基督教の伝道者なり是迄福音主義正統派と称せらるる神学の中に育ち今も尚ほ此主義の大要をば是認する処のものなり然れとも（中略）我亦旧来の神学説を以て満足すること能はず希はく其根本に溯り悉く考究し新たに余自らの神学を組織せんとす」〔ロベルト・エルスミールの著者ワード夫人〕明23・4）

徳富家の二人の従弟ほどの華麗さはないが、しかし、その発想法にはかなり類似した所がある。すなわち、ここにも、短絡思想をみることである。それでも、初期の彼は、それをキリスト教への信仰と情熱とで補っていることは、今治教会の成功からも察知できよう。

後の、「黒い眼と茶色の目」の事件では、蘆花の完全な敵役にまわる時雄であるが、その発想法は、宗教的なものも含めて、多感な少年期の蘆花にかかりのかけりを落しているのではないかと思われるのである。試みに、少し蘆花の時雄にふれた所を引用しておく。

「間もなく洋学校生徒間に基督教信仰の事あり。迫害大いに起る。時雄氏また主なる信徒の一人。小楠先生の嫡男として四方の注目する所、攻撃最も劇し。つせ子此際の苦心、言ふべからざるものありき。（中略）竊に一通の書置を認め、懐剣を帯の間に藏し、時雄氏を膝下に呼んで信教の理由を詰問す。時雄氏具に奉教の由来を

説く。つせ子大いに動き、是れよりまた甚だ迫らざりき。」（『青山白雲』明31・3）

「父の血を受け父の尊敬を見馴れた敬二には、学問修養の上からも処生上の地位からも別世界に住んで居る様な、^{己より年上}の十餘りも多い又雄さんを、たゞの従兄とは思ひ得なかつた。」（『黒い眼と茶色の目』大3・12）

「私はこの時雄さんには大変世話になつた従兄ではあるが或時は兄の如く或時は師の如く思ふて居た。従兄ではあるが私は横井さんの門人の様なものとなつてゐた。も一つ妙なことは明治十八年に三年坂の日本メソヂスト教会で洗礼を受ける時、偶々来能した時雄さんが立ち合つて呉れた事である。」（大江高等女学校に於る講演、大11・2）

「今神戸の須磨に左手不随で病臥して居られる横井時雄と云ふ人があります、是は私の従兄に当ります、又私の先生見た様なものでもあります。」（村井先生『第一外國語学校に於る演説』大13・8）

「藍花はまた、『思出の記』でも見られるように、極端に熱心な伝道師として今治の時代をすごしている。しかし、以降、同志社へ進学してからの彼は、ひとまず、キリスト教からは遠くはなれてしまふ。そして、その彼が再びキリスト教へ直情的に帰ってくるのは、先に示した、日子自女にからまるキリスト再臨の問題とか、十字架否定論議などにからまつての所である。この十字架否定論は、当時流行した自由神学、いわゆる新神学の影響下にある。そして、横井時雄は、前述の宗教のところで隙間みたように、その新神学の先駆者の一人でもあつたのだ。」

このあたりに、かなり時雄から藍花へという思考の伝承があるの

ではないかと思われるふしが存するのである。今一つつけ加えれば、『思出の記』の中で、母が息子に懐剣をつきつけていさめる有名なシーンと似たものが、時雄母子にあつたことも前出のとうりである。

なお、小楠、藍花の呼応を今一例引いておこう。

「私はまた父の師横井小楠を私の座から見下る事が出来る。彼は維新の昔己に四海の兵戈をやむる事を考へた。私の父は愛と誠を以て師に仕へたが、英霊活氣の師は父を愚直一遍の者に思ふた。彼は其自慢の弟子でも愛弟子でもなかつた弟子の其子供の中でも一番の肩と看られた末子が、彼の頭に閃いた理想を世界的に押立てるを夢にも思はなかつたのだ。」（『日本から日本へ』）

注(1) 例えば次のようである。

「予は、(中略)若くは横井小楠の世界平和思想や、それ等のものに依つて、予一個の見識を打ち建てたるものであつた。」

（『蘇峰自伝』昭10・9）

「予が小楠より受けたる感化についていへば、第一に対世界観である。小楠は封建制摠の、恰も人間が目白やカナリヤの籠の中に生活してゐるが如き時代において、『何ぞ富国に止まらん、何ぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ』と言つた。彼は実に當時に於て世界を狭しとする大規模、大見識があつたのだ。」

（『蘇翁感銘録』昭19・11）

(2) 「先生は最も善き意味に於いての臨機応変者である。」（『小楠遺稿』序、昭17・6）

(3) 時雄については辻橋三郎氏の詳説がある。

『近代文学者とキリスト教思想』昭44・6、桜楓社。

(4) 新神学について解説を引く。

「宣教20年も経ると、教職・信徒の中に従来の信仰内容への反省が起きるのは当然であった。その頃、ドイツから普及福音教会の宣教師シュピンナーが来日し、(明18)、続いてアメリカからユニテリアン宣教師ナップ(Arthur Knapp)が来日(明22)のおの機関紙を出して活動した。彼らは、知識人のためのキリスト教を主張し、人間中心的・合理主義的立場に立ち、十字架の贖罪性を批判した。」(『キリスト教大辞典』教文館)

五、

ところで、小楠の「世界平和思想」とはどのようなものであったのだろうか。そこへも少しふれておきたい。「夷虜広接大意」の中で、彼は次のように述べ、また、「海外の形勢を説き併せて防国を論ず」の中にも、きわめて自由闊達な向目的な外交方法を提示している。

「夫天地有生の仁心を宗とする国は我も又是をいれ不信不義の国は天地神明と共に是を感罰するの大義を海外萬国に示し内天下の士気を振起して器械砲艦漸を以全く備るに至りては萬国虜虜我正義に服従せざる事能はざるもの何の疑かあるへきそや」(「夷虜広接大意」嘉永6)

「方今五大洲中の勢英に帰せされは則魯に帰す英魯兩立すへからす是又勢止むへからす此に於て我那一視同仁明らかに天地の大道を以て深く彼等の私を説破し萬国自ら安全の道を示すへき也我國の萬國に冠絶して永く帝國の尊号欠ることなきは今日の習氣を一變して

天地の大道に帰せしむるにあり」(「海外の形勢を説き併せて防国を論ず」年代未詳)

彼はまた、次のような漢詩を作っている。

「送左大二姪洋行

若聽高台恩意優 一家感泣總慈憂

好將生死付蒼海 鯢躍鸚飛六大洲

同前

明堯舜孔子之道 盡西洋器械之術

何止富國 何止強兵 布大義於天下耳」

(「小楠堂詩集」)

それらを見ると、まさしく、藍花などのいうように、大きな視野をもった人であったようである。しかし、問題の世界平和論は、直接には見当らない。それは、元田永孚の『小楠遺稿』後序の中に、次のようにあらわれてくるのである。

「天地大道。萬國共由。豈容有鎖國之理。吾當開我國。明王道以交萬國。苟有用我者。吾當奉使命。先説於米國。一和協同。然後説於各國。遂止四海戰爭。其識見遙出於世論外。」(『小楠遺稿』後序、明22・11)

もっとも、この平和思想のもとになったのは、米大統領ワシントンの話を聞き、その大統領の位の交代などが、彼の理想とする韓韓の政治にも比肩しうると感激した話から出ているので、例えば、彼の話の聞き書きである次例などからも、うかがえるのである。

「真実公平の心にて天理を法り此割拠見を抜け候は近世にてはアメリカワシントン一人なるべし。ワシントンのことは諸書に見え候通國を賢に讀り宇内の戰爭を息るなどの三個条の國是を立て言行相

違なく是を事実に行き、一つも指摘すべきことは無し之候。」(井上毅『沼山対話』)

「人情を知らば戦争も停む可き道あるべし。華盛頓一人は此処に見識ありと見えたり。」(元田東野『沼山閑話』)

この点については、つとに木村毅氏も指摘されている。

そして、ここに小楠実学の一頂点があることも確かなのである。その構想は、当時、東洋の一小国の困人としての発想を一気にとびこえている。大きいのである。その大きさのゆえに、それは予言的色彩をおびている。小楠実学の特徴の一つはそこにある。

例えば、それは、ずっと後、第二次大戦後、小楠の研究者山崎正董氏が次のように、この世界思想を、きわめて興奮して紹介していることからもいえよう。

「欧州大戦以後にも国際聯盟とか、世界軍縮会議とか、或は不戦条約とかが行われて居り、最近に至りてはかの世界的学者たるアインスタインは、戦争を不可能とし、国際問題を法によつて解決するに足る国家を超えた強い秩序の創設即ち世界政府の樹立を強調し、米國はもとより英・仏その他の学者・文化人・政治家によつてその具体化が促進されようとしているが、小楠先生はかかる種々の戦争防止、平和工作の意見を、すでに今から百年前の幕末内外多事の際に、しかも最も国際情勢に暗い鎖国日本の小天地に於て主張したのである。これはたしかに一つの世界的驚異と云わなければならぬ。」(山崎正董述『横井小楠先生を偲びて』昭24・4)

そしてまた、同じような回想を、思ひめぐり、藍花について、その夫人愛子が前田河氏にもらしているのも興味深い。

「愛子夫人から、こんな手紙をいただいた。『……古い日記に

「日本から日本へ」は今日(大正十一年春)の日本人には解せられないが、二十五年もしたら花が咲く時が来る。そして又しばみ、また開くだらう。かくして生命はつづくだらう。と書いて居ります。が、本年が正に二十五年。われから先立つて軍備撤廃を所望したその思ひが、餘儀なくの姿で実現さる時代となり、うたた感概無量で、もう一度あなたによんで頂きたいものと思つたりして居ます。』(前田河広一郎『藍花伝』改訂版の序、昭22・11)

思考の短絡が、そこで共通の反応をみせ、一種の思想的な成功をもたらしているのである。

注(1) 木村毅、日本歴史新書『文明開化』昭29・11・至文堂、参照

六、

藍花の兄蘇峰は、「時流随順」という形で自在な変化を示した。その変化を、変節として人々によく批判されたことは、二回も行なわれた国民新聞社の焼打ち事件だけでも如実に知られるところである。そして、この発想法の源に小楠の「臨機応変」があった。勝海舟のいう「今日はいかう思ふけれども」の理論である。ジャーナリストとしての感覚が、この小楠の便利な思弁法をたやすく自己の内へもちこんだのである。

弟藍花もやはり、小楠の影響下にあった。彼は、時雄というワン・クッションをおきながらも、もっと直接に、小楠の思考の内質の中に入っていったようである。彼は、小楠の、この大まかな直感思考を好んでとり入れたように思われる。直情的にその世界平和思想が彼の中に入っていったのである。いわば、彼の文学的氣質がそうさせたのかもしれない。そこに、兄蘇峰との差異も生じてきたよう

ある。同じ根をもち、派生した系統樹は、そこで、くっきりと枝わかれをしてるのである。

しかし、ここで重要に考えたいのは、蘆花の源に小楠の世界平和思想があったということではない。問題は、むしろ、そういう簡明さを許す論理の直截さにある。いわば、東洋の一小国の名もない思想家が、一気にアメリカの大統領との面談を考え、あるいは、世界の平和をめざすような、短絡思想にある。この思考ならば、蘆花夫妻がアダムとイヴや日子と日女になつてもよいのである。

こういう素朴さが、彼らにとっては、諷刺ではなく、実に素直に信じてることができたのである。彼らを狂したと論ずることは、ここでは意味を持たない。この短絡思想こそ、まさしく小楠実学の落し子なのである。

この短絡思想は、日本の実学の直截思考として、蘇峰につながり、明治・大正の日本軍国化の一理論ともなった。勝本清一郎氏は蘆花の中にも危険性があったことを指摘されている。

「『日は太陽系の中心にあるべきだ。』『イザナギ、イザナミは手に手を取つて天の浮橋に立つのだ』ファッシズムの観念と邪教的妄想とが習合している。最早危険である。」

「蘆花はこの建替えが、終末が、最後の審判が、新紀元がすでにおのれの新紀元第一年に実現したものと妄想したのである。大本教より一層性急で無謀である。」（「蘆花とキリスト教」昭31・8「文学」）

そしてまた、これは、山崎氏のいわれるように、全体的な眼や予言的な要素ももっていた。世界平和というように、一気に、その思考の一番上まで走りあがることのできたからである。

これらは、その単純さの故に思想の両翼において有効性をもっていたのである。直截さの故に、思考の全容を包摂する大きな力ともなりえた。しかしまた、この思考は、まさにその故に脆弱さをもっていたのである。論理の中間項切りすての方法は、あらゆる思想を許容しただけだ。

思想の展開の方法として、これはきわめて興味深い事実ではないだろうか。そして、それがまた、日本近代文学史や、近代思想史における、蘇峰、蘆花の意味といえよう。

付言すれば、この思考の態度そのものが、あの、小楠の高弟由利公正により示された五ヶ条の誓文とかかわり、また、熊本でついた肥後の殖産実業ともかわり、明治以降、近代化を行なう日本の発想の一つの形体になつていったのではないかと思われるのである。

ただ、これでもって、蘆花の文学の全容が解けるものではないので、やはり、ここでも、単に、蘆花の単純思想形体の一源流に小楠的な思考が深いかげりを落しているのではないかという指摘にとどめたいと思う。例えば、唐木氏などの示されるような、キリスト教の意味、さらには、「モラル」「道徳」家としての蘆花の意味を考えるには、私は別の機会を必要としなければならぬ。

また、近代文学史や思想史の上からいえば、白樺派の最も短絡的な人類中心思考があることも忘れてはならないと思う。武者小路実篤の行なつた「新しき村」や有島武郎の農場解放といった具体的行動を考察に入れたとしても、この白樺の方が蘆花よりも、より一層短絡して、人類の平和、向上につながる観念思考をもっていた。この短絡にくらべれば、「美的百姓」であるにしても、「日子日女」

にしても、蘆花の方がより行為性がある。それは、いわば、明治実学の残存といえるかもしれないのであるが、それを論ずるには、すでに紙幅はつきた。

注(1) 吉本襄編「氷川清話」明30・11参照

(2) 唐木順三「徳富健次郎」昭21・1参照

— 広島文教女子大学助教授 —